

今週の放送



今週の放送

過去の放送

WEB限定放送

プレゼント

AVANTIについて

ラジオの楽しみ方

お知らせ

お問い合わせ



PODCAST



TWITTER

SUNTORY TOKYO FM

TOP > 今週の放送

江戸は水運の街



放送曲目リスト

来週の予約の噂

◎2012年10月6日放送分

土曜日の夕方にしては珍しく教授がいらっやらないと思ったら、今週は雪乃さんと一緒に小型船で神田川や日本橋川を巡るツアーに行っているそうですね。船の上からメールで写真と、向こうで小耳に挟んだお話を送って下さいました。

教授からの便りに当店も「江戸」の話で持ちきり。その方面に詳しいお客様が江戸時代の水運について、様々なお話を教えて下さいました。教授が送って下さったお話もあわせて、本日はそのお話をここでご紹介させていただきます。皆様のご意見・ご感想も、ぜひ[こちら](#)からお聞かせ下さい。

◎今回のお客さま

黒田涼さん

宮加奈子さん

苦瀬博仁さん

泉麻人さん

久染健夫さん



黒田涼さん(作家/江戸歩き案内人)の

『埋め立ての街・江戸』の話

江戸の街は堀割だらけで、堀割の中に住んでいるような街だった。そもそも江戸の街は江戸湾に突き出た岬の沖合を埋め立てて作った街。江戸城がちょうど岬で、大手町や丸の内は海だったし、銀座あたりは江戸前島という半島だけど、その先の築地・八丁堀もやはり海だった。

たとえば河岸(かし)という言葉がある。現在では魚河岸くらいしか残っていないけど、昔は船から物資を上げる場所を総称して「河岸」と言った。飯田橋の駅前が「神楽河岸」なのはその時代の名残。佐伯泰英さんの小説で有名な「鎌倉河岸」、水道橋の「市兵衛河岸」なども同じ。ただ、江戸の頃の河岸が形として残っているのは浜離宮くらい。

世界の大都市の中でも江戸は「埋め立て地の上に発達した」というところが非常に珍しい。もともとが海だから堀割が計画的に作られていて、江東区あたりは碁盤の目状に堀が残っている。

大名屋敷も内陸の上屋敷や中屋敷とは別に、船で物資を運び込める蔵屋敷を設けていた。だから江戸の街は屋敷だらけだった。町人が住んでいた場所は狭くて、面積的には武家地が6〜7割で、あとは寺社地と町人地が半々くらい。人口比率で言えば武士が50万で町人が50万だった。

地方から参勤交代で江戸に出てきた武士はあまり仕事がなかったようで、月にせいぜい3〜4日しか働かず、あとはほとんど物見遊山だったらしい。そうやってお金を落とす武士のおかげで江戸は繁栄した。

【Hot Links !!】

[黒田涼と江戸を歩く](#)
[江戸東京探訪シリーズ 江戸幕府以前の江戸 \(My Trivia - Chiaki Komiya-\)](#)
[江戸の原型と神田川の流路 \(フォトとメッセージ\)](#)
[江戸散策 | 第39回 | 本格的な埋め立ては、月島から始まった。\(クリナップ\)](#)



宮加奈子さん(江戸東京再発見コンソーシアム)の

『江戸城の石垣』の話

江戸東京再発見コンソーシアムはいろんな面白いイベントを企画しているプロジェクト。日本橋界隈の老舗や企業、学校、団体などが集まって、かつて「お江戸日本橋」と言われ江戸の中心だった場所に、もう一度昔のような賑わいを取り戻そうとして頑張っている。

その活動の中で「江戸と言えば水運」という話が出て、電気ボートで川を巡る「お江戸日本橋舟めぐり」が定期運行されるようになった。その舟から川縁の石垣をよくよく見ると、石垣に紋様が刻まれているのが分かります。これは刻印石と言う。

江戸城を造る時、幕府は各大名家に命じ、石高に応じて石垣に使う石を提出させた。命じられた大名たちが江戸の近郊で石切場を探したところ、一番近かったのはなんと伊豆半島。石垣はタイルのように見えるけど、奥行きもあるかなり巨大な石。そんな石はそうそうなかった。

それで伊豆半島から巨大な石を運ぶことになり、その時に石に刻まれたのが刻印だった。単純な家紋なら刻むのも簡単だけど、複雑な家紋だと石に刻むのは難しい。そこで家紋を簡略化したマークが使われていることが多い。そもそも石切場自体が各大名家でシェアされていたので、石切場で混ざらないように刻印が使われた。

巨大な石を石切場で切り出し、海岸線まで下ろし、海路130kmを通して江戸まで運ばれた。それをすべて人力でやっていたのだから「無駄にたくない」という想いが刻印には込められているような気がする。

【Hot Links !!】

[江戸東京再発見コンソーシアム](#)

[お江戸日本橋舟めぐり各コースのご案内](#) (江戸東京再発見コンソーシアム)

[日本橋川クルーズ](#) (YouTube)

[刻印石](#) (温泉民宿 大塚)

— お江戸日本橋舟めぐりにて —



苦瀬博仁さん(東京海洋大学教授)の

『江戸開発の歴史』の話

鉄道や自動車のない時代、もっとも大量に輸送できる交通機関が船だった。だから一般的に家康は秀吉に命じられて江戸へ行ったことになっているけど、一部では家康は江戸の方が良いと考えていたという説もある。

世界の大都市は川に面している。これは川には海と違って波がないのでモノを運びやすいから。家康が来る前の江戸は湿地帯だったけど、工事をすれば物流の活発な土地にできると家康は考えたはず。戦国時代を勝ち抜いた兵士の知識があれば、それくらいは分かる。

開発上で必要なのは物資の供給。だから水運は重要だった。菱垣廻船や樽廻船が全国から物資を運んだのも、関東平野が肥沃になる前の話。当時、関東は良いモノが獲れなかったのも、お酒など日用の物資は上方から「下って」いた。一方、関東で獲れたモノは「下らない」。それが今の「くだらない」という言葉の語源だと言われている。

水は神田上水を引いて確保。それから塩は千葉県の手取で作らせ、江戸へ運ぶために小名木川を掘った。江戸城の内堀と外堀を作りつつ、各水路も作り、残った場所を住宅地にして、江戸の街を作っていった。

日本橋魚河岸は佃島の漁師が魚を運んできて売った場所。野菜は秋葉原の近くの神田河岸。昔、秋葉原に青果市場があったのはその名残で、秋葉原駅自体が野菜を運ぶための貨物駅だった。日本橋川沿いに河岸の名前がたくさん残っているのは、そんな昔の商いの名残。

【Hot Links !!】

[苦瀬博仁のページ](#)

[東京川の手散歩「江戸の運河、小名木川」](#) (TMweblog)

[江戸の市街づくりと魚河岸のはじまり](#) (魚河岸野郎)

[神田青果市場発祥の地](#) (千代田区観光協会)